

脚本「万華鏡」

脚本・原作 黒猫千鶴
くろねこちづる

オリジナル脚本
放送後音声公開可
放送後脚本公開可

二〇一七年十一月八日

登場人物

冬真（とうま）

三春の孫。東京から遊びにきた大学二年生

《十河圭祐

三春（みはる）

おじいちゃんを早くに亡くして一人暮らし

《三好まみ

たまに孫の冬真がくるのが楽しみ

慷慨・あらすじ・プロット

文字数 ●三千文字

所要時間 ●十一分

1. (N) : ナレーション

M : 音楽の名前 音楽①

万華鏡

原作・脚本 黒猫千鶴

登場人物

冬真 (とうま)

祖母の家に遊びにきた大学二年生

三春 (みはる)

冬真の祖母

おじいちゃんを早くに亡くし一人暮らし

2. 祖母の家に冬真が遊びにきた 正午過ぎ「玄関↓家」

SE : チャイムの音 ピーンポーン

SE : 戸の音 ガラガラガラ

冬真 「おばあちゃん、いるー？」

三春 「あら、冬真くん。いらっしやい」

「どうしたの？」

冬真 「近くまできたから、ついでにきたんだ」

三春 「そうだったの・・・」

「ちよūdよかった」

冬真 「お団子があるんだけど、食べていかない？」

「いいの？ ラッキー」

M : 音楽の名前 音楽②

三春 「はい、お団子とお茶」

冬真 「ここら辺って何にも変わらないよね」

三春

「それは何もないって言いたいの？」

冬真

「そうじゃないけどさ……」

三春《笑いながら》

「ふふっ、冗談よ」

冬真

「小学生くらいの時に、こうして縁側で

スイカ食べてたな〜って思いだしてさ」

三春

「なーに？ まだ若いのに年寄りみたい

なこと言っちゃって……よっこいしょ」

三春《座る》

冬真

「別にそんなんじゃないけど、懐かしい

なって思っただけ」

冬真《後ろに倒れる》

「食べてすぐ横になると牛になるわよ」

三春

冬真《笑いながら》

「母さんも同じことを言うけど、おばあ

ちゃんの受け売りだったんだね

……あれ？（笑い止まる）」

3.

万華鏡見つける・万華鏡の話

M…音楽の名前

音楽②

三春

「何か物珍し物でも見つけたかい？」

冬真

「これ、

いつもおばあちゃんが大事にしてた万華鏡……」

三春

「ああ、そこにあつたんだね…ありがとう、見つ

けてくれて」

三春

「目が悪くなってからは探し物もろくに出来なく

なっちゃってねえ……」

冬真

「まあ、ダンスの間に落ちてたからね。

はい、これ……大事なやつなんだから？

いつ買ったの？結構、汚れてるけど」

三春

「これはね、おじいちゃんにプロポーズ

してもらった時にもらったんだよ」

冬真《最後―驚嘆》

「ふーん……ってことはめちゃくちゃ昔じゃん！」

「そりゃ、あちこち汚くもなるよな……おばあちゃんとおじいちゃんが結婚したのっていつ？」

三春

「終戦間際だったから……かなり昔かねえ……」

冬真

「戦争中ずっと持ってたの？」

M…音楽の名前

音楽④

三春

「そうだよ。これを持っていると、戦争に行ってしまったおじいちゃんも近くにいる、守ってくれているって気がして……お

ばあちゃんを守ってくれていたんだよ」

冬真

「万華鏡がおばあちゃんを守る……」

三春

「そんなバカな話あるもんか、って顔だね」

冬真《苦笑い》

「まあね……」

三春

「まあ、言ってしまうえば気持ちの問題さ。

信じる者は救われるってやつだね」

「それでも私は信じたかったし、あの人がくれた謎を解きたかったね」

冬真

「謎？」

三春

「おじいちゃんが言ったんだよ『怖い時、寂しい時、これを持っていて。僕は近くに

いられないけど、これで君を守るから』てね」

冬真

「何だよ、それ……」

三春 「おじいちゃんも格好つけたかったんだよ
きつと」

冬真 《状態を起こす》
「よつと……」

冬真 「ちよつと 貸して」

SE…万華鏡の音
シャラララララ

M…音楽の名前
音楽⑤

冬真 「んー……覗いてみても
普通の万華鏡だと思うけどなあ……」

三春 「ふふっ、何十年と覗き込んでいた私でもわかない仕掛けを、おいそれと冬真くんに見破られたら、おじいちゃんに顔向け出来ないよ」

冬真 「でもさ、秘密知りたくないの？」

三春 「そりゃ、知りたいさ」

冬真 「いっそ、壊してみる？」

三春 「それはちよつとねえ……」

冬真 「新しいの買えば？」

三春 「これ、おじいちゃんの手作りなんだよ。
だから、大事に持っておきたいの……」

冬真 「でも、知りたいんでしょ？」

三春 「秘密を知っても、万華鏡が壊れていたら意味がないだろ？それなら知らないままでいいさ」

冬真 「これはおじいちゃんの形見
大切にしたい物だから……」

冬真 「ごめん、俺……」

三春 「気にしなくていいんだよ。冬真くんは謎を解いてくれようとしたんだから、ありがとうね」

冬真 「……ねえ、もう一度見せてくれる？」

三春

「ああ、いいよ」

「キレイってこと以外、何もわからないのよ…」

冬真

「そうだね…確かにキレイだ…」

SE…万華鏡の音

シヤララララ

三春

「夢中になっちゃって…よっこいしょ」

三春《立つ》

新しいお茶でも持つてこようかね」

冬真

「おじいちゃんは何を見せたかったんだ？」

冬真

「それにしてもキレイだな…」

冬真《寝転がる》

「これを作って大変だったんだろうな…今みたいに材料だつてすぐ手に入らないだろうし…」

三春

「だからこそ、宝物なんだよ」

4.

謎をよぐ

冬真

「あれ…今」

三春

「どうしたんだい？ そんな驚いた顔して…」

冬真

「おばあちゃん、今何したの？」

三春《笑う》

「何って…これと言って何もしてないよ？」

ただ、冬真くんを上から覗き込んだくらいで…
寝転んで見たら何かわかったのかい？」

冬真

「もう1回！ もう1回やってみて！」

三春《笑いながら》

「どうしたんだい？ この子は…」

冬真《息を呑む》

「…っ！おばあちゃん！！これだよおじいちゃん
んがやりたかったことって！」

三春

「ちよつと、冬真くん…」

冬真

「いいから、早く寝転んでみて！」

三春

「何だって言うんだい…よっこいしょ…」

冬真

「いい？万華鏡を持って、そしたら俺がこうして覗き込んで暗くするから、そしたら中を見て！」

三春

「はいはい……」

S E …万華鏡の音

シヤララララシヤラララ

三春

「これは……」

冬真

「さつき見ていた世界と、全然違うだろ！」

三春

「こんなこと……」

三春

「……（言葉にならない）」

冬真

「おじいちゃんはこれを言いたかったんだよ！」

三春《涙ぐみながら》

「あの人の言っていたことは本当だったんだね」

冬真

「おばあちゃん？」

三春

「戦争中はよく防空壕にいたからね、その中は凄く暗いんだ。その中で万華鏡を覗くと見える世界があるってことだったんだよ……」

冬真

「でも、どうして当時は気付かなかったのさ」

三春

「そりゃあ、そうさ……皆生きるか死ぬかの時に、のんきに万華鏡を覗く奴がいるかい？」

冬真

「た、確かに……」

三春

「ふふっ、本当にバカな人だね……戦争に一番向かない癖に『守る人を守るために行ってくる』なんて、格好つけるから……」

冬真

「俺もいつか言ってみたいな、そんなこと」

三春《微笑みながら》

「冬真くんはまず、私みたいな相手を見
付けないとね」

冬真《苦笑い》

「おばあちゃん……」

三春

「きちんと家には帰ってるのかい？ 大学が忙し
いのもわかるけど、たまには帰ってあげなよ？」

冬真

「わかってるよ……」

三春

「本当、似た者親子なんだから……よっこいしょ」

冬真

「……親父、何か言ってたの？」

三春

「さあね、私は何も聞いてないよ」

ただ、お母さんが心配してたよ」

冬真

「……（何も言えない）」

三春

「やりたいことがあるならしっかりと言いなさい」

冬真

「おばあちゃん……」

三春

「ん？」

冬真

「俺、おじいちゃんみたいに

格好いい男になれるかな？」

三春

「さあね……でも、今の冬真くんは万華鏡みたい
に輝いてる、真っすぐ前を見ているよ」

冬真

「……俺も万華鏡作ってみようかなー」

SE…万華鏡の音

シャララララシャラララ

冬真

「おじいちゃんみたいにキレイに出来るかな」

三春

「冬真くんは冬真くんの輝きを放つさ」

(N) …ナレーション

冬真役〓十河圭祐

三春役〓みよしまみ

原作・脚本〓黒猫千鶴

選曲・効果〓十河圭祐

— END —